

雲仙普賢岳噴火の体験談

平成2年11月から噴火活動を再開した雲仙普賢岳は活発な活動を続け、平成3年6月3日、噴火開始後最大規模の火砕流が発生し、死者・行方不明者43人の被害をもたらした。噴火活動は長期化し、土石流や火砕流等により家屋、道路、農地等に甚大な被害をもたらした。これは、その大災害の体験談です。

体験談その1

それは、いつもと変わらぬ平成3年6月3日の初夏の夕暮れ前、夕飯の支度には少し早いかな、と思いながら何気なく空を見上げた。実家のある安中方面の空が西から東へと褐色に染まり異様な雰囲気。テレビをつけると、臨時ニュースが流れており、「普賢岳火砕流発生、多数の負傷者行方不明者が出ている模様」と、繰り返し伝えているではないか。私は早く実家に知らせなくてはとダイヤルを回すも誰も出ない。テレビを見ると、温泉病院に運び込まれたという負傷者の名前の中に、父親の住む近くの門内町の友人の長男と同じ町内の消防団員の二人の名前があった。

布津町に一時避難したと聞かされた実家の家族の居所が分からず、噂を訪ねて第三小学校へ。更に体育館・武道館へと探して回る。灰と大騒動の中でごった返す武道館の受付で呼び出してもらおうと、やっとのことで見つかりほっとした。

それから降りしきる灰の中を悪戦苦闘しながら毎日のように武道館に父を訪ねる。その頃は普賢岳の北側にも溶岩が見え始め、日に日に成長し形を変えながら頻発する火砕流、崩落を繰り返し、覆い来る噴煙に昼間も闇となる不気味さはたとえようもない。瞬く間に一面に積もる灰、ライトを点け行き交う車、目も口も開けられず立ち尽くす。喉が痛い。普賢岳が、あざ笑うかのように不気味な音をたて今日も崩落を繰り返す。追い討ちをかけるように大雨洪水警報は文字通り土砂降りとなり、埋め尽くされた水無川は氾濫し、土石流は北安徳町を押し流し有明海まで及び、国道51号線は土砂や岩石で埋まり遮断され通行止めとなる。実家近くの畑も何枚も埋まり、通い慣れた道も今は遊砂地となり、辺りは一変し見る影もない。

9月15日、雷鳴を伴いまたも大爆発、焦げ臭くものすごい火山礫に怯える。この先何が起こるかと不安で靴と懐中電灯はいつも玄関に置く。近くの工業高校グラウンドに待機していた災害派遣隊の



ヘリコプターも飛行不能となり移動する。周囲の人達もほとんど避難し、寂しい夜が続く。一時終息するのではとうわさもあったが、治まるどころか頻繁に噴出崩落を繰り返し、頂上の池も神社も埋まってしまったらしい。立ち並ぶビルを思わせる溶岩、斜面にへばり付き今にもずり落ちそう。度々出される大雨洪水警報。雨は強い南西の風に容赦なく泥雨となって辺りかまわずたたき付ける。ホースで流すぐらいでは落ちず、家の周囲はスコップで取って回る。毎日が灰との戦い。度重なる土石流に、まとも中・南安徳町が壊滅状態と聞き行って見る。親戚の家も屋根の一部を残し流され見渡すかぎり河原となり涙が出る。警戒区域や勧告地区の延長も30何回であろう。いつ終わるとも知れぬ火山活動。火砕流・土石流にすべてを失い仮設住まいを余儀なくされる人達の、灯りの見えない暮らしがある。

体験談その2

平成3年5月14日夜半、大雨となり地震の様な地響きがして土石流が発生。消防団の避難勧告で上木場農業研修所に避難。翌朝、帰宅して驚かされた。土石流が砂防堤を乗り越え大岩石が堆積し、わが家も流失寸前だった。更に水無川が氾濫する危険性があるので、重機で平原橋が解体撤去され、大岩石堆積物が搬出された。南上木場町は眼鏡橋が流失すると孤立化する危険性があるので五小体育館に避難した。5月23日、溶岩ドームが高く膨張するのを確認、貴重品の非常搬出、疎開を始めたのだった。当時、危険と盗難防止で立入が規制され、許可証が交付されたが、取材陣が規制を無視し入城、道路に展開し、貴重品非常搬出にも邪魔になり大変困惑させられた。



6月3日午後、親子3人で貴重品、仏壇の非常搬出のため自宅に戻った。午後4時頃、危険の予感がしたので車に飛び乗り全速で帰路を走り下った。「農業研修所」通過時、消防団員は警備に、報道陣は待機中だったが、その直後43名の尊い人命が奪われた。火砕雷鳴と黒煙が視界を襲い、轟音と同時に暗闇になり霰の様な大粒の灰雨が降り、車のワイパーも役立たず手探り運転。必死の逃避行で漸く死線を突破し、九死に一生を得た。

まことに人命の生と死を分けた運命の一瞬だった。怒号悲鳴阿鼻叫喚生地獄図絵さながらであった。当時火砕流は、時速140kmとのことである。負傷者を搬送する救急車のサイレン、搬入された負傷者の応急治療、死者の処置等各病院は受入対応にパニック状態となった。避難住民は五小から三小体育館へ灰雨の中を徒歩で移動。上木場住民は地区から殉難・死者が出たので、更に白山公民館へ再移動した。夜テレビで生中継され地区全体が紅蓮の火炎に包まれ、家屋山林が炎上する映像を見て、胸の張り裂ける思いだった。

翌日から県知事要請で自衛隊災害派遣隊が来援。早速遺体捜索活動に出動。重機動車両を駆使、障害物を除去し、「ヘリコプター」と空陸共同作戦を展開。40遺体収容に約1週間を要した。収容された遺体も黒焦げとなり一体が二体であったり、車が吹き飛ばされ車内で白骨化するなど当時の凄惨さが偲ばれ、身元確認も困難を極めた。連日殉死者の葬儀が続く、殊に消防団員の若い未亡人が乳幼児を抱いての焼香献花する姿に悲涙に咽んだ。若し5月、大土石流の前兆で避難していなかったら地区住民が全滅したであろうと想像される。

体験談その3

平成3年5月頃から火砕流が流れてきた。ちょうど家の手伝いをしていた時ドドドドッという音とともに、溶岩ドームが崩れてきた時には、言葉も出ない位驚き、体の震えが止まらない。夜中は音が響き、真っ赤な溶岩が流れるのを覚えている。火砕流が起きる度に夜は目が覚め、体が震え、眠れない日々が続いた。梅雨に入り毎日雨が降り続けた夜には、土石流が発生した。私の住む北上木場地区の公民館から五小の体育館と、私の家族は不便な生活を強いられた。食事は三度とも弁当、テレビを見る時間、就寝の時間もすべて決められ、仕方のないことだとあきらめてはいても、その不自由さによるストレスは日に日にたまっていった。

そして6月3日の朝を迎えた。その日、父は仕事を休んで祖母の服を取るためと飼っていた犬に餌を与えるために家に帰るつもりでした。4時頃に学校から帰ると体育館に父がいたので「家に帰るんじゃなかったの」と聞くと、父は「消防団の方々が見回りのついでに行ってくれと言ってくれたのでお願いした」と答えた。そんな話をしてしている途中ものすごい雨が降って来た。「雨だ」と思った時、「外で黒い雨が降ってるの」と妹が帰って来て変なことを口走った。私は冗談を言っているのかと思いながらも外を見ると本当に真っ黒い雨が降っていた。何があったのだろうと思い、体育館に戻ると、皆テレビに釘づけになり、泣き崩れていた。父に「何があったの」と聞くと「大火砕流が起きてすべてなくなった」と小さな声で言った。私はとっさに家で飼っていた犬のことを思い出し涙が溢れた。それから母が帰ってくるのを待って私たち家族は三小の方に避難した。私は、大火砕流が起きてから次の日のことをあまり覚えていない。あまりの悲しみと恐怖で、自分自身を見失ったような感じでした。一つだけ覚えていることは、父も母も妹も私も避難する間、一言も口をきかなかったことです。

翌日、白山公民館の方へ避難しなおした。そこで大火砕流で焼けた家々と題して一面に写真が載せてある新聞を目にした。その写真には、私の家も写っていた。私はその時、生まれ育った家のことを思い出した。飼っていた犬と散歩した道、友人と遊んだ庭、家族と楽しく過ごした家、すべてを思い出していくと、数えきれないくらいの思い出が浮かびます。大切な物すべてを失ってしまった。この時、私は何をすればいいのか分からなくなった。でも、ある手紙を読んで立ち直ることが出来た。「頑張ってください。泣いていても何にも始まらないよ。負けないで」と書いてあり、私は勇気づけられ、そして励まされた。



体験談その4

平成3年6月3日16時過ぎ、火砕流が発生し島原市の消防団員、報道関係者等43名の尊い生命が奪い去られた。その時、大野木場地区全域の364世帯、1484人に避難勧告が発令され、消防団は二

人一組で、地区を1軒1軒廻り、人が残っていないか確認に行った。

6月8日18時に警戒区域を設定したばかりの20時頃、大火砕流発生により深江町内にサイレンが鳴り響いた。自宅が心配な避難者に代わり消防団が災害状況を調査することとし、団長の私と副団長の二人でいくことになった。自分は死ぬかもわからない。しかし、大野木場の人たちのために行かねばならない、という心の葛藤の中、「必ず帰ってくるので、避難している人が行かないように見守っていてくれ。」と他の団員へ頼み、私達は大野木場地区へと車を走らせた。



二人で大野木場地区全域を見廻り、何軒かの火災を確認した。水無川の方に行くと、赤々とした炎が下る、真っ赤な水無川が目飛び込んできた。この川を見たのは、後にも先にも私達二人だけだろう。国道57号線の水無川の欄干に火が登る中を、島原市門内町の石油店まで入域し、付近の家々が無事であることを島原消防本部に伝達した。その後、深江町に帰りつき避難者に視察状況を説明したが、生きた心地はしなかった。

6月30日は、朝から雨が降り続き、山の寺地区を警戒していた深江町第2分団より、鉄砲水が出そうだという電話があり急行した。農道を通り国道251号に出ようと海岸の方へ向い島原鉄道付近まで来た時、「団長、山の方から雲のほうてきいよる（這ってきている）！」という叫び声。見てみると、山の方から真っ白な雲が水無川を這って下りてきていた。「下の方へ逃げよう。」と団員が言ったが、「いや下は危ない。死んでしまうぞ。」と、叫びました。下は橋げたに材木がつもり水無川が氾濫してしまうと思ったからです。そこで、あえて山の方へ逃げ、命からがら脱出することができた。

9月15日、しばらく小康状態だった山から大火砕流が発生し、大野木場小学校やその周辺の住宅から火災が発生した。鉄筋コンクリートの校舎や体育館が炎を上げて燃えていた。降灰のため詳しい状況がわからず火災の確認をしている時、第8分団の団員の一人が「団長、次に燃えるのは私の家です。ポンプ車を持ってきて消火してもいいですか」と言ってきた。私は、「あそこは警戒区域で、これから先へは団員であっても入れることはできないので諦めてくれ」と言うと、団員は涙を流しながら「わかりました」と言い、自分の家が燃えるのを黙って見守り続けていた。今まで80日余り警戒を続けていて、自分の家が燃えるのを黙って見守り、バケツ一杯の水もかけることができなかったことは、その団員そして団長としても本当に辛い心境でした。土石流や火砕流で自分の家を失っても、地域の防人として、古里を守り抜いた深江町消防団168名に感謝し、共に地域を守ったことを誇りに思います。

